

学校自己評価

園の目標

仏教環境のもと人格形成の基礎を培い、自ら感じ、自ら考え、自ら行動することのできる子供を育てる。

I、教育の目標

正しい生活習慣を身に着けている子

人や生き物を愛することのできるあたたかい心の子

知恵、心、体がバランスよく発達している子 をめざす。

II、本年の重点目標

- ・①教育活動の充実
- ・②教員の資質の向上・・・保健、健康、特別支援教育への理解
- ・③保護者との連携
- ・④安全への取り組み

III、評価項目と取り組み状況

評価項目	取り組み内容		取り組み状況
教育活動の充実	体力づくり・・・友だちと一緒に、体を動かすいろいろな遊びをすることで、体を柔軟に動かす経験をし、運動を楽しみ、こどもたちの健やかな成長を図る。 昨年に引き続き、なわとびや鉄棒など、目標を立てやすい事柄にも積極的に取り組む	B	体育の専門の先生の指導のもと、年齢に応じた活動をおこなった。毎日の活動の中でもマラソン、鬼ごっこ、かけっこ、縄跳び、ボール遊びルールを共有する遊びなどを楽しんだ。特に、縄跳びや鉄棒は子ども自身が目標を定めやすく、それぞれが頑張る姿が見えた。
	異年齢の交流・・・地域や家庭で異年齢の子供との交流の少ないことを考慮し、意図的に交流の機会を持ちながら、異年齢のこどもたちの行動に関心を持ったり、教えあったりする中で、自分より幼い子を思いやったり、年長の子に憧れたりする経験をしていけるようにする。	A	一年の行事計画の中に、異年齢交流の機会を計画的に取り入れ、異年齢のお友だちへの関心や、親しみを持てるようにした。幼い子への思いやりや年長者のすることへの関心や憧れが高まった。年少と年長のかかわりが多く、年中が少なかったため、次年度考慮、工夫したい。
	身近な自然に興味や関心を持つように、野菜を栽培し、こどもたちが収穫した野菜を調理して食べる活動にも取り組む。また、小動物や庭の木や草花にも興味をもてるように働きかける。	B	昨年に引き続き、ザリガニを育て、餌をやったり保育者が、ケースの掃除をするのを見たり、野菜や草花を育てて、収穫したものを、調理して食べたりした。柿とりをして、家庭で干し柿を作ってもらったり、春の七草を観察したり、保護者の協力も得ながら子どもたちの経験を深めることができた。
	年中行事の意味を理解し、日本の文化に触れる機会を持つ。	B	季節の行事を理解して体験できるようにするとともに、家庭では体験することが少ないであろう、七草粥や柿とりを体験し日本の文化に触れた。また、年長児は中国の留学僧に出会うなどほかの国の文化にも気づくことができた。

項目	取り組み内容		取り組み状況
職員の資質の向上 (保健、健康、特別支援の理解など)	感染症や、食物アレルギー、特別支援教育等の幼児教育現場での今日的な問題について、職員が、正しい知識を持ち、適切な行動がとれるように努めるとともに、職員間で情報を共有する。	B	特別支援に関する園外の研修に、積極的に参加した。支援の必要な子の問題を皆で共有し、個別の指導計画をたて、保護者対象の講演会を開いたり、関係機関との連携を図った。食物アレルギーのある子どもたちについては、職員全体が情報を共有し、注意した。感染症については、職員自身まだまだ学ぶ必要があると感じている。
保護者との連携	園児の活動を保護者に知らせ、保護者にも日本の文化や行事に関心を持ってもらえるよう働きかける。 個々の幼児を理解し、園と家庭が協力して子育てを進めることができる様懇談の機会を多く設ける。 保護者に、幼児理解をしていただくために学びの機会を企画する。	B	年3回懇談、希望者懇談の機会を持ち、家庭での様子、園での様子などを知らせ合い連携をとれるようにした。干し柿の作りや、春の七草については、プリントや掲示で、こどもの活動に関心を持ってもらうように心がけた。特別支援の専門家の講演会をしたり、食育についての話を子どもと一緒に聞く機会を設けたりした。
安全への取り組み	災害時の対応について教職員間で共通理解しあい、避難訓練を繰り返すことにより、子どもたちが迅速に避難し、安全を確保できるよう準備する。	B	一年を通した計画に基づき、いろいろな場合を想定した訓練をおこなった。職員の消火訓練をおこなったり防災座布団の使い方に慣れるよう練習を繰り返した。子どもたちも慌てず、落ち着いて避難できるようになってきている。

【評価の基準】

A	十分達成されている	B	達成されている	C	取り組まれているが成果が十分でない	D	取り組みが不十分
---	-----------	---	---------	---	-------------------	---	----------

教員の反省より

教育活動の充実	(体力づくり) 縄跳びや鉄棒など、子どもたちが目標を決めて達成していけるよう、専門家の指導を受けつつ進めていきたい。各学年で、体操やヨガをしたり、目標を持って、工夫しながら活動を進めることができ、子どもたちも達成感を味わうことができた。
	(異年齢の交流) 年長、年少の交流に比べて年中の他学年とのかかわりが少なかったという反省を踏まえ、指導計画の変更の必要がある。小さい子への思いやりや、年長児への憧れなど、よく育ったように見える。
	(身近な自然に親しむ) 教師自身が、季節の移り変わりや身近な自然に親しみをもち、子どもたちどのように伝えていくかを工夫していく必要がある。また、子どもの活動はクラス便りで知らせるようにしたが、理解していただけていない保護者もあったので伝え方に工夫が必要である。子どもたちは自分が育てた植物に愛着を感じ、成長を楽しみにしながら観察することができた。目の前で育った野菜を食べることも楽しめた。
	(年中行事の理解、日本文化に触れる) 学年によって活動の違いはあるが、絵本や体験による行事の理解が進んだ。特に年長児は、お習字やお茶など機会が多かった。
職員の資質の向上(保健、健康、特別支援の理解)	特別支援の研修に参加することで、実践できたことも多く、今後も引き続き学んでいきたい。感染症に対する知識に自信のない教員もあるので、さらに、研修を重ねる必要がある。

保護者との連携	個人懇談の機会を設けたり、必要に応じて懇談をする等、保護者との連携を図るよう努めた。毎月のクラス便りやプリントで、子どもたちの活動をお知らせする努力をした。降園の方法変更に伴い、子どもの様子を毎日事細かく伝えきれないという反省もあり、工夫が必要である。
安全への取り組み	月に一度、様々な場面での避難訓練を行い、子どもたちも、あわてず避難することができるようになってきている。

総合的な自己評価結果

結果 B	理由 各項目について、努力をし、目標の達成に努めたが、保護者への伝え方等、工夫の余地のあることも多い。安全への取り組みに関しては、慣れ過ぎてしまわないよう、常に新たな気持ちを持つことが大切であると感じる。
------	---

IV、反省と今後取り組むべき課題

職員の個々の自己評価については、園児一人一人をよく観察し、理解しようと、努力する態度が読み取れた。また、保護者に対しても、クラスや子どもの様子など、しっかり伝える様心掛けているが、保護者によっては十分でないと感じるようである為、工夫が必要である。

特別支援に関する研修に参加し、個々の支援の工夫をするなど努力を重ねているが、感染症等に関しての知識に自信がないと感じる者もいて更に研修の必要がある。

安全への取り組みに関しては、危機管理マニュアルを基本に、慣れ過ぎないように、見直しを加えながら慎重に進めたい。

何よりも、子どもたちが、安全に過ごせ、生き生きと、感じ、考え、行動できる子に育つには、どのような取り組みを用意すればよいか、原点に立ち返るとともに、本年の反省を踏まえて次年度に繋げていきたい。